

Ⅳ 大沼遺跡出土土器の編年的位置

県内における古代の土器編年は、学史的には桜井清彦^(注1)の提唱した第一型式・第二型式を基盤として、青森県以南の諸研究に自らの資料を対比させる状況で進展してきた。しかしながら、今日の課題として地域的な土器編年をいつまでも地域から遊離した形で継承するのは考古学的視点の欠如と言わざるを得ず、不明な部分は不明として地域資料に側した編年の組み立てが求められている。青森県内における古代遺跡の調査も昭和40年代後半から増加の状況をみせはじめ、現在まで調査した竪穴住居跡の数は1,000以上になっていると思われる。

そのような中で、古代土器の編年を精力的に取り組んだ三浦圭介は、1982年11月に野辺地町で行なわれた青森県考古学会研究発表において、7世紀後半から12世紀に亘る詳細な編年試案を提示した事があった。^(注2)この資料は現在まで印刷物として発表されていないらしく、該期の論文等に参考にはされながらも資料活用の点では報告者の意を汲みとれないところがある。ただ、その概要については今日でも普遍的側面を有しているため、公開の日が待たれる。また、宇部則保は最近になって7・8世紀の土器編年を、馬淵川周辺から出土することが多くなった豊富な資料と周辺地域との比較によってⅠ群～Ⅳ群に編年している。^(注3)現在のところ、編年の視点から考察された土器変遷をたどれるのは、上記二者のものだけであり、各遺跡の調査報告書内で一遺跡の土器変遷を考察している研究者もあるものの少例にすぎない。^(注4)

今回大沼遺跡の調査によって出土した古代の土器を観察するうちに、その実年代を想定する資料の少なさに気付き、ある程度の土器変遷試案が必要であろうと感じるようになった。筆者は1986年に某出版社の依頼で、青森県における7～10世紀の土器を執筆したことがある（該資料は未刊行のため今だに資料提示できない状況にある）。当時は、もっぱら中世資料の研究に明け暮れていたため十分に吟味した内容になっていない点はあるものの、未刊のままで終止するのも筆者の意に反するため、本報告の紙面を借用して資料提示してみたいと思う。その上で訂正・修正部分を加え、11～12世紀までの試案をおこない研究者の御教示を期待したい。【7～10世紀の記述中〔〕以外は1986年時の執筆原文のままである】

(1) 7世紀の土器（第23図）

青森においては、弥生土器から土師器を主体とする土器群への変遷は明確でなく、現在なお暗中模索の状況にある。その中で、7世紀に製作されたと推定される土器群は、八戸市根城東構地区から出土した土師器が比較的まとまった資料であり〔後に八戸市丹後谷地遺跡・田面木平遺跡でも良好な資料が加わる〕、現在のところ類例は少ない。八戸市根城遺跡の近隣には最北の末期古墳とされる〔後に丹後平古墳、下田町阿光坊古墳、尾上町原古墳等が発見されている〕鹿島沢古墳群があり、青森県において本地域が比較的早く大和朝廷の影響を受けていたものと考えられる。今後、根城遺跡(110号・122号住居跡)の出土土器が県内における7世紀の土

器の標式となる可能性が高く、充分に吟味を要するところである。

器種としては、坏・高杯・長胴甕・球胴甕・甑・壺・罍などがあり、特に坏は形態の上で東北南半における栗圀式との強い類似性が認められる。

坏は、ロクロ未使用で内外面に段を有し、体部下半から口辺部にかけて外反する形状と一部に口辺部が直立するものがあり、底は丸底、内外面のへう磨きは丁寧に施され、内面を黒色処理するものが大部分である（第23図－1～4）。

高杯は、脚部の明確なものが少ないため全形を理解できる資料は限られるが、上記杯の形態的特徴を有しながら脚部上半は縦位のへう磨き、下半に横位のへう磨きを施す例がみられる。

甕には長胴形と球胴形の二形態がある。長胴形は口辺が大きく、くの字状に外反し、肩部に段を胴部上半にふくらみを有して底径は小さく底部は突き出るものが多い。また、底部内面は丸味をもつものと平坦なものがあり、ハケ目の後にへう磨きを施すことが多い。器高が24cmぐらいで大小に区別でき、小型のものはへう削りが行なわれた後内外面にへう磨きを施し、底部内面は丸味を有する例が多い（第23図－7・8）。大型のものは肩部に段を有し、へう磨きは丁寧に施される（第23図－9・10）。球胴形は胴部中央の張り出しが顕著である。大型のものは口辺の外反度がきつく、底径が小さく突き出しを有し、胴部内面はハケ目、外面がハケ目の後でへう磨きを施す（第23図－12）。小型のものは口辺の外反度が緩く、内外面ともにハケ目の後にへう磨きを施す例が多い（第23図－11）。

甑は、無底式のものがあり、口径は器高より大きく、底径に対して3倍以上の広がりをも有する。肩部に段を有するのは長胴甕と同様であるが、内外面のへう磨きはより丁寧に施されている（第23図－6）。

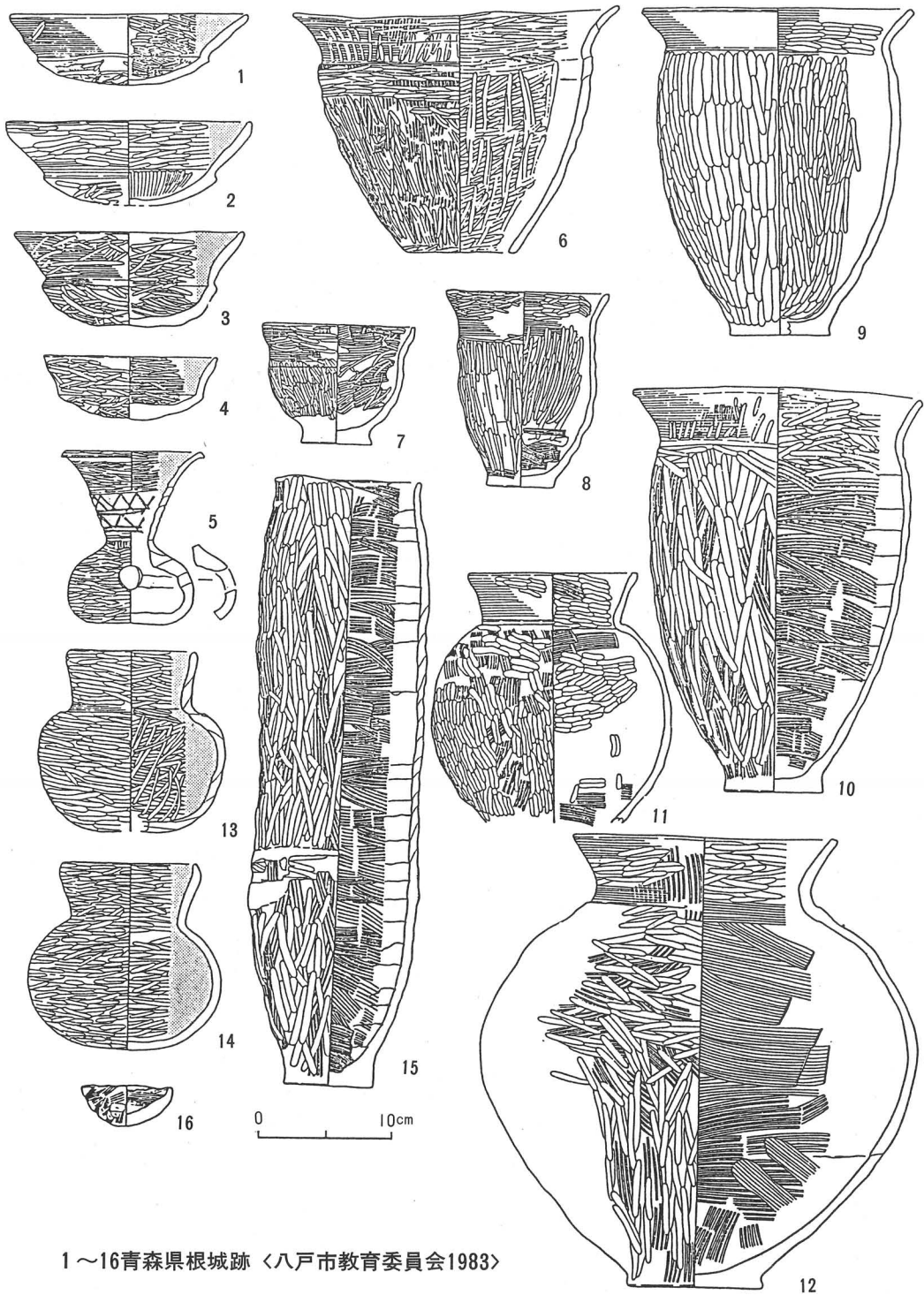
壺は、器高14cm前後のものが多く、頸部に段を有するものとなないものがあり、頸部から口辺にかけての外反度は少ない。内外面ともにへう磨きは丁寧に施され、内面を黒色処理している（第23図－13・14）。

罍は、丸味の強い胴部に大きく開いた口頸部が付き平底を呈する。口縁部は外側に反って下部につまみ出され、頸部には鋸歯状沈線文が2段施され、胴部中央に孔がある。全体は丁寧にへう磨きが施され、内外面に黒色処理がなされている（第23図－5）。

これらの他、特異な器種として筒形土器と手捏ねり土器がある。前者は器高45cmの長さで底部が突き出す円筒形である。外面はハケ目の後にへう磨き、内面はハケ目のみの仕上げがなされ、底面には木葉痕とハケ目がみられる（第23図－15）。後者は、外面がへう削りとハケ目のものである（第23図－16）。

以上の土器の特徴をまとめると、各器種はすべてロクロ未使用のもので、坏は丸底で胴部下半から口辺にかけて外反気味の立ち上がりを呈し、内面を黒色処理する例が大多数である。長胴形の甕は、口辺部の外反度は緩いが胴部上半でのふくらみが認められ、球胴形とともに底径

第23図 7世紀の土器



1～16青森県根城跡〈八戸市教育委員会1983〉

は小さい。坏・甕・壺などの各器種におけるへう磨きは極度に発達し、丁寧な器面仕上げを行っている。

これら根城東構地区の土器は、現在のところ7世紀後半に位置づけられると考えられるが〔後に宇部は周辺地域土器の比較から7世紀前葉～7世紀中葉と位置づけている〕^(注5)、県内における土師器の初現の問題と深くかかわっているため、今後の調査に期待する部分が多い。特に青森県の場合は、南からの文化伝播とともに北からのそれに注意を払う必要があり、鹿島沢古墳群の形成年代とともに検討すべき課題である。

〈参考文献〉 八戸市教育委員会 1983『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』

(2)8世紀の土器 (第24図)

8世紀に入ると県内各地で類似する土器群の出土例が多くなる。東北南半でいう国分寺下層式に併行する土器であり、五戸町中ノ沢西張遺跡(2号・3号住居跡)、八戸市根城遺跡(118号住居跡ほか)、尾上町李平Ⅱ号遺跡(1号・3号住居跡)、黒石市浅瀬石遺跡(6号・19号住居跡ほか)、市浦村十三中島遺跡(採集資料)などが県内の代表的遺跡である〔後に三沢市小田内沼(1)遺跡(1号住居跡)、尾上町下安原李平遺跡(49号住居跡など)が追加されつつある〕。また本時期の様相として、前半は須恵器と土師器の共伴が認められないのに対し、後半になるとクロロ使用土師器の出現前段ということもあり、へう起しの須恵器坏を共伴する例が認められる。

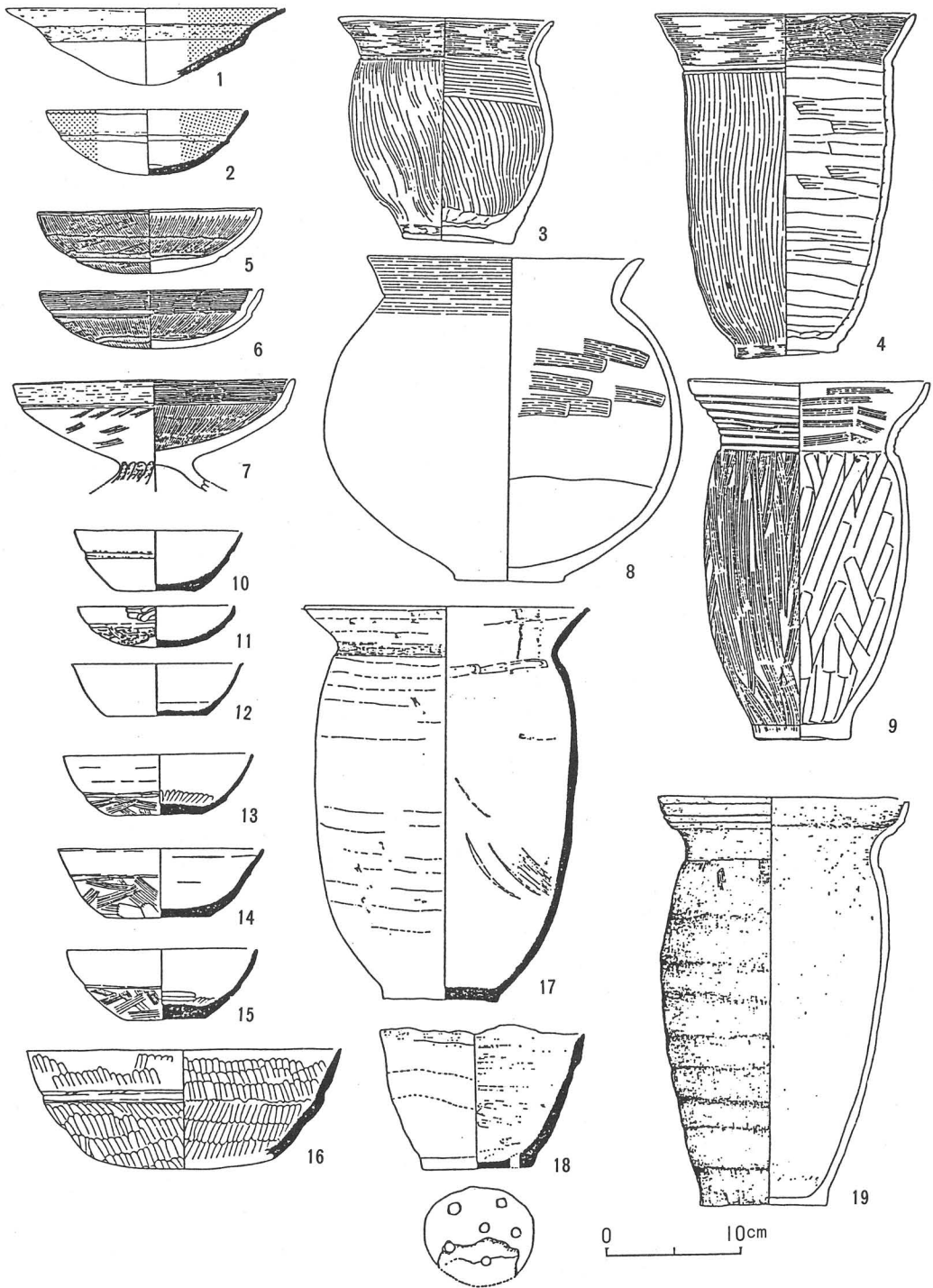
土師器 器種としては、坏・高坏・長胴甕・球胴甕・甑がある。

坏は、丸底で胴部下半および上半に段を有し、口辺は一部に外反するものもある(第24図-1)が大部分は内湾して立ち上がる。内外面のへう磨きは7世紀に引き続き多用され、内面の黒色処理も一般的である(第24図-2・5・6)。しかし後半になると胴部下半の段は次第に上半に移り、段下半のへう磨きの省略化、丸底から平底への変化、器体の小型化が認められるようになる。特に浅瀬石遺跡出土の坏に顕著である(第24図-10～11・13～15)。

甕は7世紀と同様に長胴甕と球胴甕がある。長胴形は、口辺部がくの字状に外反するものと、頸部から口辺にかけて内湾するものがある。前者は、肩部に段を有するが胴部上半のふくらみは7世紀ほど顕著でなく、次第に直線的な胴部となる(第24図-3・4・17)。後者は、外面頸部から口辺にかけて3～8条の沈線あるいは段を施す。どちらも底部内面は平坦なものが多くなり、底の突き出しは7世紀のように著しいものは少ない。器面の仕上げは、頸部から口辺にかけて横方向に指ナデ、胴部外面を縦位にへう磨きするものが多い(第24図-9・19)。球胴形のものは、口辺部がくの字状に外反し、胴部の張り出しは中央部下位に位置するものが多くなる。器面の仕上げは口辺部を横に指ナデ、胴部外面をへう磨きしている(第24図-8)。

高杯は、坏形土器の特徴を踏襲し、ハの字状に広がる脚部を有する。脚部上半は縦位のケズリやハケ目、下半は横位の仕上げが施され、一部に透し窓を有する例も認められる(第24図-7)。

第24図 8世紀の土器



1～4 中ノ沢西張 5～9 同十三中島 10～18 同浅瀬石 19 同李平Ⅱ号 (12のみ須恵器) < 1～4 桜田隆1976、5～9 成田誠治・鈴木克彦1977、10～18 古市豊司ほか1976、19 葛西励1980 >

壺は、器高10cm前後で胴部は球状を呈し、口辺部がくの字状に外反して広口となる。胴部から底面にかけてハケ目がみられ、底は平底である。

他の器種としては浅鉢に近いものがあり、内外ともにへう磨きを多用し、胴部中央に段を有するのは坏形土器の影響であろうか（第24図-16）。

須恵器 坏は、平底でへう起し、土師器より底径が大きく器高の低いものが多い（第24図-12）。甕・壺については、現在のところ明確な土師器との共伴関係を認めることはできないが、須恵器坏の存在から出土する可能性は否定できない。〔本期の須恵器は近年北陸産と推定される搬入品が多くみられるようになり、器種も坏だけでなく壺の出土が確認されつつある。〕

以上の土器の特徴をまとめると、坏は胴部下半の段が次第に消滅してゆき、それとともに丸底から平底へと移行して小型化の傾向が認められる。7世紀の段階で盛行するへう磨き仕上げは次第に減少して、有段の坏については内面および段上半にのみ施され、下半は磨きを省略するものが多くなる。長胴甕は胴部上半のふくらみが緩くなり、底径が大きくなって安定した平底になってゆく。口辺部の外反度は7世紀段階より傾斜を増し、頸部から口辺にかけて数条の沈線を有するものも認められるようになる。さらに、へう磨き仕上げが減少して、外面の仕上げを省略する例が多くなる。他の器種にあっても、後半になるとへう磨き仕上げは減少して簡略な仕上げを施すものが増大し、ロクロ成形を主体とする土器群に移行してゆく。

〈参考文献〉 桜田隆1976 県埋文報第28集 『五戸町中ノ沢西張遺跡古街道長根遺跡』

古市豊司ほか1976 県埋文報第26集 『浅瀬石遺跡発掘調査報告書』

（3）9世紀の土器（第25図）

9世紀になると、土師器に伴い須恵器が少量出土するようになり、一般的にロクロ成形の器種が多くなる。土師器の器種としては、坏・長胴甕・埴といわれる広口鉢があり、以前にあった高坏・球胴甕・甑・壺などはほとんどみられなくなる。須恵器は、坏・甕・壺の器種が現われる。また後半になると須恵器製作の影響を受けたと考えられる赤焼土器〔須恵系土器と同義で使用していたが検討の要あり〕といわれる土器群が出現し、土器製作技術面でも進展が認められる。

県内での主要な遺跡としては、黒石市浅瀬石遺跡（8・31号住居跡）、八戸市和野前山遺跡（1号住居跡）、八戸市根城遺跡（108号住居跡ほか）、浪岡町松元遺跡（15号住居跡）などがあり、県内全域に分布がみられる。

土師器 坏は、ロクロ成形で底部は糸切および静止糸切の平底である。内面は黒色処理するものも多い（第25図-1～3）。8世紀の段階でみられた胴部の段は、前半期には若干内面に痕跡を残すかほぼ消滅する。その過渡的段階として、外面口辺部直下に一部分へう磨きを施す例や、底部内面に縦位の磨きを施す例（第25図-18）などがみられる。器型上の特徴としては器高に対する底径の比が縮小する傾向があり、いわゆる碗形の器型が多くなる（第25図-9・10）。

・18～22)。

甕は長胴甕の器型だけで、前半は頸部から口辺部にかけての外反が広く大きいのが、後半になると短くそり返えるような形状のものが多くなる(第25図-24)。頸部から口辺部にかけては、8世紀でみられた沈線状のものから段を有するものに変化し、2～3条と数は減少する(第25図-16)。長胴甕の中には器高30cm以上の大型のもので、20cm以下の小型の2種に分類できる。成形上から言えば前者は巻き上げが多く、後者はロクロ使用のものがみられるようになる(第25図-23)。器体表面の口辺部は横位のへらナデ、胴部は縦位のへらナデを施す例が多く、内面の仕上げは次第に省略するようになる。

埴については8世紀以前の段階ではみられなかった器種であり本時期を特徴づけると考えられるが、量的にそれほど多いというわけではない。ロクロ成形により内面を黒色処理し口縁はやや外反、底には低いながらも台を有している例(第25図-5)もあるが、一般的にみられるものは巻き上げ成形後に口辺は指ナデ、胴部内外面はへらナデを施す例で、煮沸用に使用されたと推定されている。〔埴の用途が煮沸用以外の饗膳用にも使用されている可能性が強いので大型坏類の系譜に入れることも検討している。そのため本時期からの特徴的器種と考えるには十分な資料をそろえていない〕

他の器種としては、円筒形の深鉢型土器などがあり、巻き上げ成形後外面底部に縦位、内面上半にへらナデを施している(第25図-17)。

須恵器 坏は、ロクロ成形で底部は糸切りとへら起しが認められる。切離し後は底部立ち上がりへら状工具でナデつけるものもみられる(第25図-4・11)。

甕は、内面に叩き具による叩き目の認められる例がある。しかし類例が少なく詳細は不明である。

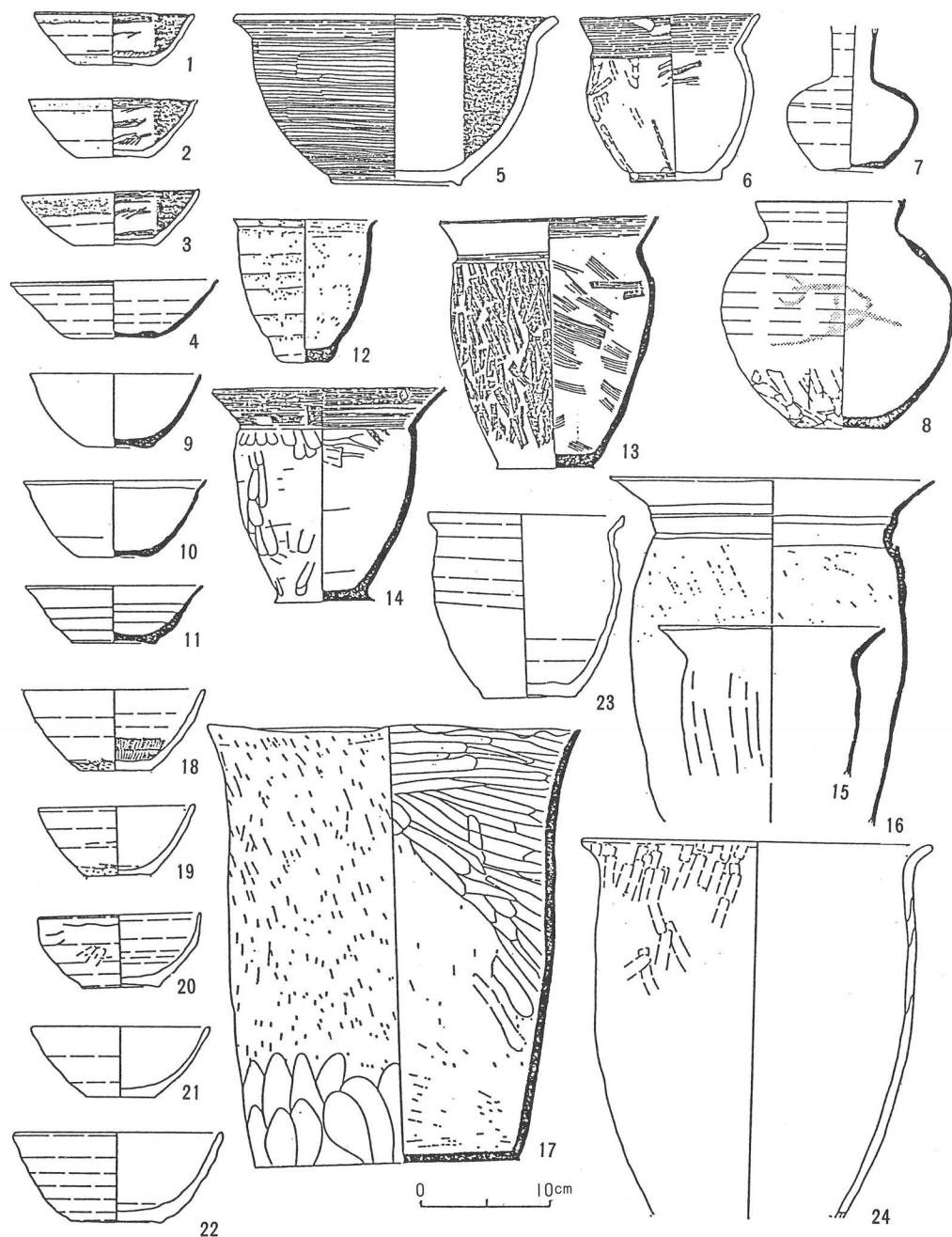
壺は、広口と長頸の2種類があり、どちらも底部から胴部中央、胴部中央から肩部、肩部から口辺部と3段階による成形がなされ、底部から胴部にかけてはへら削り、へらナデが施されている(第25図-7・8)。

9世紀の土器の特徴をまとめると、第一に前代まで一般的である巻き上げ成形からロクロ成形への変化、第二に土師器と須恵器の共伴をあげることができる。これは東北部における最初の土師器分類を提唱した桜井清彦の、土師器第Ⅰ型式から同第Ⅱ型式への移行という大枠と符合するものである。しかしながら、ロクロ技法の導入が土師器生産の転換期となることについて、明確な編年の基盤および集落構成のあり方から不明な点が多く、今後に残された課題である。さらに土師器に共伴する須恵器についても、現段階では県内における窯で生産されたという根拠は薄いため、須恵器の搬入路を発見することも急務の課題となっている。

〈参考文献〉 桜田隆ほか 1976 県埋文報第26集 『浅瀬石遺跡発掘調査報告書』

白鳥文雄 1984 県埋文報第82集 『和野前山遺跡発掘調査報告書』

第25図 9世紀の土器



1～8 青森県和野前山 9～17同浅瀬石 18～24同松元 (4・7・8・11は須恵器) <1～8 白鳥文雄1984、9～17桜田隆ほか1976、18～24杉山武ほか1979>

(4)10世紀の土器（第26図）

10世紀になると県内における調査例も増大し、資料も多くなる。特に須恵器の絶対量が多くなることは、県内における持子沢系須恵器窯・前田野目系須恵器窯等の製品が各遺跡に供給されていることによる。

代表的遺跡としては青森市近野遺跡（78号住居跡ほか）、黒石市板留(2)遺跡（7号住居跡）東通村アイヌ野遺跡（2号住居跡）、青森市三内遺跡（44号住居跡）、青森市螢沢遺跡（5・9号住居ほか）などがあり、土師器と須恵器の相伴関係は明瞭となる。器種としては、土師器に坏・長胴甕・埴があり、須恵器には坏・鉢・壺（長頸・広口）・甕がみられる。

土師器 坏はロクロ成形、平底で胴部にやや張りのある碗形の器型が主体を占める（第26図－1～3）。内面を黒色処理したり放射状に磨きを施す例（第26図－8・9）あるいは底部上端にへら削りを施す例（第26図－8・10）も継続的に製作されているものの、いわゆる赤焼土器といわれる須恵器製作の影響を受けた坏が増大する。また、出土量は少ないものの内面黒色処理後、放射状の磨きを施し、底に高台を貼り付ける例（第26図－19）も認められる。これらの坏には時折外面胴部下半を中心に墨書文字の施された例があり、「大」「田」「寺」などの文字を確認できる。

甕は、9世紀段階までみられた頸部の有段がほぼ消滅し、口辺は狭くくの字状にするどく外反するようになる。器高30cm前後のものと15cm前後のものに二分でき、前者は巻き上げ成形後内外面にへらナデを施す例（第26図－7・12・16）が多く、後者はロクロ成形が多くなる（第26図－4・5）。底は平底で、胴部上半にややふくらみを有する例が多く、底部までの張り出しも比較的安定した形となる。

埴は、粘土紐による巻き上げ成形後、口縁を平端に成形し、内外面をへらナデ仕上げにすることが多い。底は平底ないしは丸底である（第26図－6）。

須恵器 坏は、ほとんどがロクロ成形であり、口辺部がやや外反する例が多い。また重ね焼きの痕跡とされる火ダスキを放射状に残す例もあるが、須恵器本来の暗灰色の色調だけでなく黄灰色・黄白色など各種の色調を呈するものもある。これらの坏には胴部下半から底にかけてへら記号が認められる例が多く、現在20種類余りが確認されている（第26図－11・14・15・18）。

甕は、器高50cm、胴部径40cm前後の大型の製品が多く、口辺は外反しながら立ち上がり、外面は頸部下半から底まで叩き痕を有し、底は丸底のものが多い。成形にあたっては底部から胴部までが巻き上げ、頸部から口縁までがロクロ成形した後に接合し、接合部の叩き目は格子状になっていることが多い。頸部にはへら記号を施す例（第26図－17）がある。

壺には、長頸壺と広口壺の二種類がある。長頸壺は、ロクロ成形後、肩部と底部で接合している。外面の仕上げは、頸部はロクロ、肩部から底部にかけてはロクロとへらナデの併用・底はへらによるが一部に菊花状痕も認められる、底は平底、上げ底、高台状のものなどがある。

頸部あるいは肩部上半にへう記号を有する例が多い（第26図-13）。広口壺は、ロクロ成形後、外面胴部下半をへうナデし、胴部上半にへう記号を有する例が多い。胴部の張り出しは下半で顕著になり、小型甕に近い器型となるが長頸壺に比較して出土量は少ない（第26図-20）。

10世紀の土器の特徴をまとめると、須恵器の増大と土師器における仕上げの簡略化を指摘できる。坏型土器についても、前代からの技法を踏襲した土師器が残るものの、相対的には須恵器坏および須恵器製作の影響を受けたロクロ成形の赤焼土器が大半を占め、器型も碗形のものと後半以降は皿形に近い器型に分化する傾向を示す。

須恵器については、持子沢系窯跡と前田野目系窯跡の製品が主体を占めるものの、いずれにも属さない須恵器も出土していることから、各地域における供給地の同定が課題となっている。また上記窯跡の存続年代がいつごろまでであったのか、現状では把握できない状況にあり、今後に残された大きな問題である。

〈参考文献〉 三浦圭介 1977 県埋文報第33集 『近野遺跡(Ⅲ)三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』

桜田 隆 1978 県埋文報第37集 『青森市三内遺跡』

藤田亮一 1979 『蛸沢遺跡』

(5)11世紀から12世紀の土器の概略

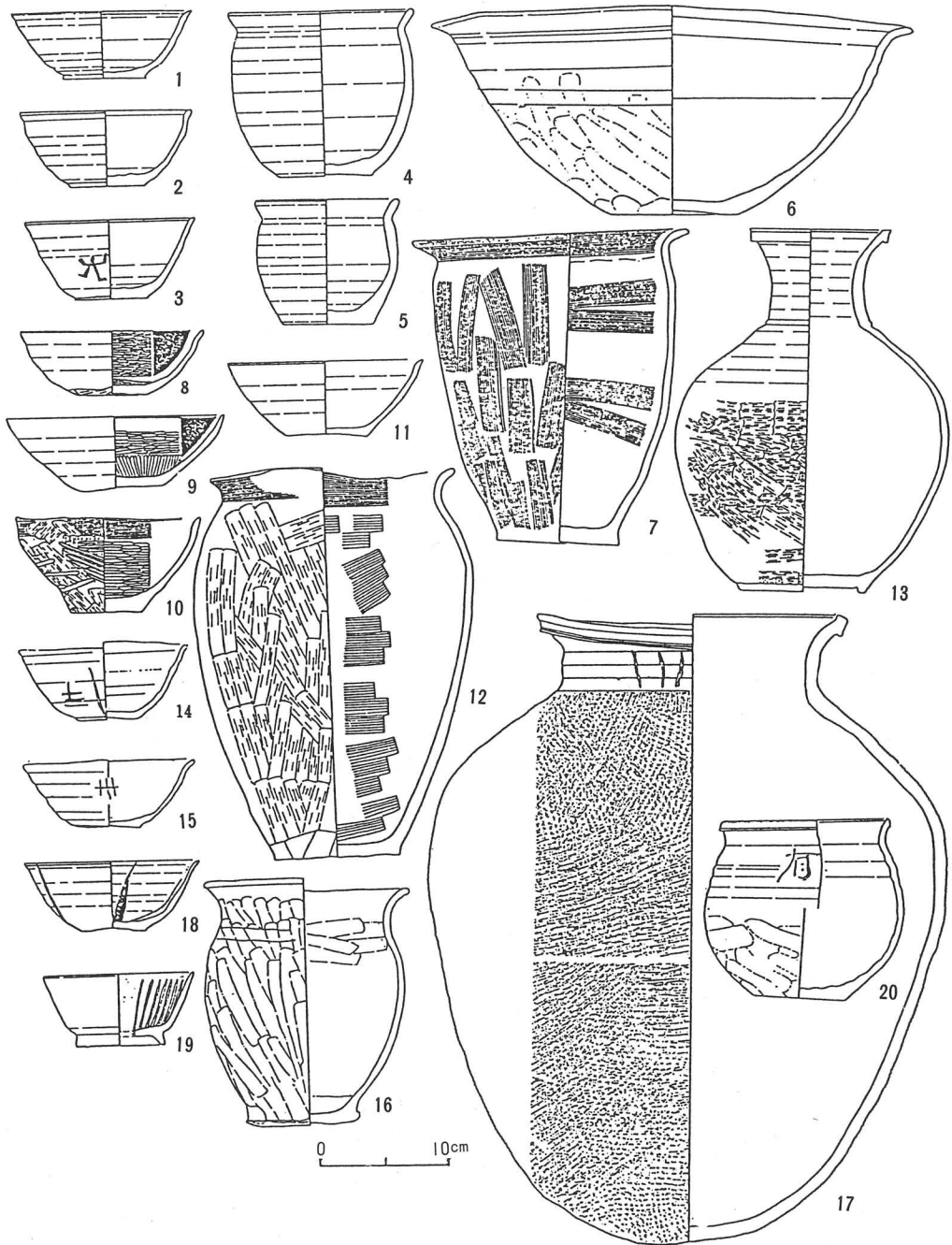
上述した編年試案に付加する形で11～12世紀の土器を考えてみたい。三浦圭介は11世紀前半の特徴を神明町遺跡4号住居で出土した皿形土器を一つのメルクマールと考え東北南半の須恵系土器に対比させようとした。^(注6) この皿形土器の出現がいかなる原因によるものか筆者もまだ理解できずにいる現状ではあるが、近年10世紀代の年代観を有する「灰釉陶器」を県内で散見するようになった。^(注7) ^(注8) ^(注9) 沖附(1)遺跡、旧大光寺城(2)遺跡であり、熊野堂遺跡でも類似資料が発見されているようである。今かりに皿形土器が灰釉陶器の影響下によって出現したと考えると、皿形土器の出現を10世紀代以降のことと考えなければいけないことになる。三浦圭介氏に直接聞いた所では耳皿（皿形土器の変形）も灰釉陶器の影響ではないかという指摘もあり、皿形土器・耳皿の出現は灰釉陶器の存在を抜きに考えられないのではなかろうか。また「須恵系土師質土器」の名称を提唱している福田健司は、10世紀まで須恵器を模倣していた土器の系譜が11世紀以降は木器・緑釉陶器・山茶碗を模倣するように変化するという。^(注10)

^(注11) 青森県内において、該期の遺跡から出土する陶磁器をみると、蓬田大館遺跡から出土・表採した中国製白磁と青磁が11世紀～12世紀前半の年代観を有し、県内では最も古い陶磁器ということになり、高館遺跡出土の白磁は12世紀の年代観が推定されている。さらに浪岡城跡出土白磁四耳壺は12世紀後半に比定され、平泉遺跡群出土かわらけと類似した土器が相伴している。^(注12) ^(注13)

（中崎館出土陶磁器も相伴する遺物から12世紀後半の年代が推定されている。報告書未刊）

以上の事を考えながら、11世紀と12世紀をみると、10世紀後半から11世紀にかけての資料と

第26図 10世紀の土器



1～7 青森県近野 8～13同アイヌ野 14～17同三内 18同板留(2) 19・20同蛭沢 (11・13～15・17・18・20は須恵器) <1～13・18三浦圭介1977・1980・1982、14～17桜田隆1978、19～20藤田亮一1979>

(注14) (注15)
して神明町遺跡4号住居跡、羽黒平遺跡3号住居跡の遺物をあげることができる。神明町遺跡4号住居跡では、土師器の器種として皿・碗・甕(大小あり)があり、須恵器の器種として大甕と長頸壺が認められる。羽黒平遺跡3号住居跡の遺物では土師器の器種として皿・高台付皿・碗・甕(大小あり)、須恵器には長頸壺がみられる。いずれも須恵器は甕・壺の貯蔵形態だけになって坏がみられなくなり、土師器が食膳具の主体を占めるようになっていく。

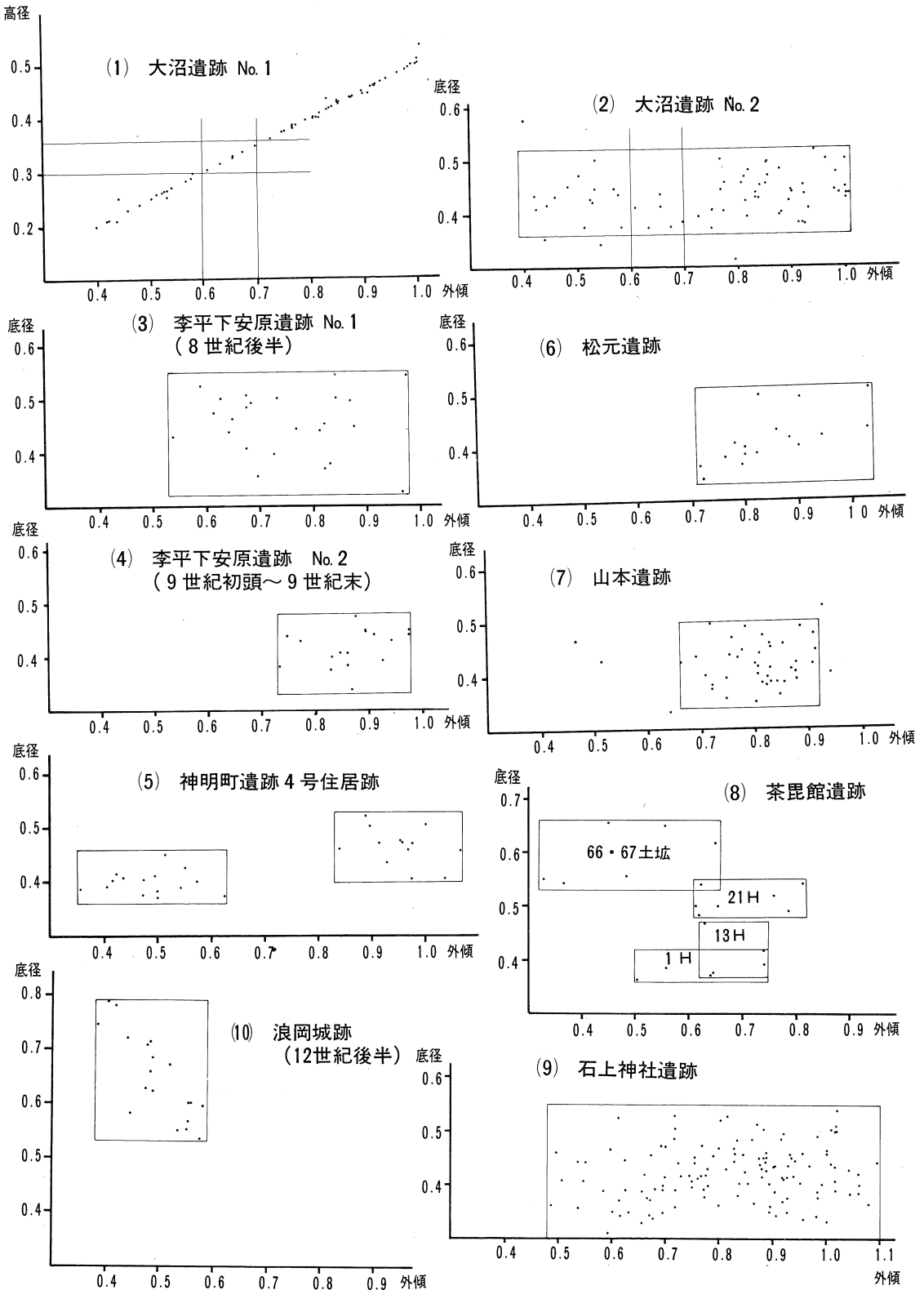
(注16)
これに対して10世紀代の主体的年代観を有した山本遺跡の出土遺物を見ると、須恵器坏(火ダスキを有する例が多い)は一定量が認められ、須恵器甕・壺も一定量の出土がある。このことから皿形土器の出現と須恵器坏の減少は相関関係を有した一連の流れとみられ、蓬田大館遺跡では須恵器に長頸壺と甕の破片しかみられなかった事も陶磁器の年代観と対応している。ただし、前述した皿形土器と耳皿の関係については、山本遺跡においても耳皿が2点ほど出土していることから若干の時間差を有して先出するのかもしれない。このような10世紀後半から11世紀にかけての変化とともに、11世紀中頃から12世紀前半にかけての変化は、把手付土器や羽釜の出現と擦文土器の相対量の増大、さらに須恵器の消滅という現象で理解できると考えられる。

把手付土器と羽釜の出現が何時からかという問題とともに、それらの土器がどのような機能で使われたのかという点も加味して考える必要がある。羽釜は煮炊具と考えてよいが、把手付土器については今だに明確な解答がでていない。さらに少例ではあるがこの頃から内耳土器も散見されるようになり、煮炊具の主流が土器から鉄鍋に移行しつつある現象を想定することが可能となる。(注17)その上で食膳具としての碗・皿は、11世紀以降の遺跡で特に出土例が多くなる木器に移行している可能性も否定できず、10世紀代の遺跡と比較すると碗・皿の相対量は激減の印象を受けるほど少なくなってくる。ただ少なくなるものの、土器食膳具の系譜はある程度保持されており、須恵器のような消滅に至る過程とは相異が認められる。

今回、食膳具としての碗・皿について大沼遺跡の法量を考えながら、他遺跡出土例と比較する事をした。第27図がそれであり、この分布状況から次の事が推定された。

- (1)ロクロ成形の前段階である8世紀後半では、外傾指数と底径指数がそれぞれ広い分布域を示す(第27図-(3))のに対し、ロクロ成形が主体となる9世紀になると碗形の法量が規格化され(第27図-(4))はじめ、10世紀のある段階(須恵器坏が大きく生産される頃)では最も規格的な碗形となる(第27図-(7))と考えられる。
- (2)ところが、10世紀のある段階では(山本遺跡例)、規格化とともに皿形への分化傾向が現われ始め10世紀後半から11世紀にかけて皿形と碗形への二極分化が進む(第27図-(5))と考えられる。
- (3)さらに、この二極分化は次第に碗形の量を減じながら皿形の方角に進み(第27図-(8))、12世紀後半には皿形だけに移行してしまう(第27図-(10))と考えられる。

第27図 土師器坏形土器の指数分布図



この分布図の正否は別にして、食膳具に関する変化の一端を推定する意味で、ロクロ成形無調整坯を製作する集団における法量変化が、ある程度時間軸の中で変化することは感知できる可能性が高い。今後、時間を費やししながら土器変遷の過程を追求してみたいと考えている。

(6)大沼遺跡出土土器の編年的位置

大沼遺跡から出土した土器を、どの時期と考えるか上述した内容を基にして考えてみる。

まず、出土土器の内容として土師器皿・碗・甕・窓付土器・壺・須恵器大甕・壺・坯の器種が認められ、施釉陶器に近い製品（壺）も存在した。このような器種の組み合わせと類似した土器^(注18)を出土している遺跡として当初石上神社遺跡を比較していた。ところが石上神社遺跡の場合は、把手付土器・羽釜・擦文土器等の11世紀中頃から12世紀前半の土器も出土し、かなりの時間幅が存在する事に気付いた。第27図-(9)で法量分布をみると、外傾指数領域が大沼遺跡に比較して0.1ほど高位に位置し、底径指数領域も幅が広がっている。さらに大沼遺跡で皿と碗の区分に使用した外傾指数0.6~0.7の周辺に分布密度が多くなり、法量の様相に違いが認められる。

皿と碗が二極分化した状況で出土した神明町遺跡と比較した場合、碗の法量は大沼遺跡が低位に位置し、皿の法量は高位に位置するところから、二極分化の前段階に大沼遺跡をあてはめることができると考えられ、若干の須恵器坯が出土していることも前後関係の上からは容認できると考えられる。また、山本遺跡と比較した場合、底径指数の幅は近似しているのに対し、皿形の絶対量が増大する外傾指数領域で明確な相違が認められ、大沼遺跡は山本遺跡に後続するものではないかと推定される。

以上の結果から、大沼遺跡は10世紀後半から11世紀前半の時間幅に編年されるべきと考えられ、今後他の重要な遺跡と比較しながら細かい時間変遷を考察してゆきたいと思う。

〈参考文献〉

- (注1) 桜井清彦 1958 東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題 『館址』
- (注2) 三浦圭介 1982 青森県における奈良・平安時代の土器編年一覧 『青森県考古学会研究発表資料』
- (注3) 宇部則保 1989 青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として— 『北海道考古学第25輯』
- (注4) たとえば三宅徹也 1988 県埋文報第111集 『李平下安原遺跡発掘調査報告書』
- (注5) 注3に同じ
- (注6) 注2に同じ
- (注7) 成田誠治 1986 県埋文報第100集 『沖附(1)遺跡』
- (注8) 高橋 潤 1988 平賀町埋文報第17集 『旧大光寺城(2)遺跡発掘調査報告書』
- (注9) 宇部則保 1988 八戸市埋文報第32集 『熊野堂遺跡発掘調査報告書』

- (注10) 福田健司 1987 『日野市落川遺跡調査概報Ⅴ』
- (注11) 荒川正明 1987 『蓬田大館遺跡』
- (注12) 成田誠治 1978 県埋文報第40集 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』
- (注13) 工藤清泰 1989 『昭和61・62年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡Ⅹ』
- (注14) 杉山武・他 1980 県埋文報第58集 『金木町 神明町遺跡』
- (注15) 木村鉄次郎 1979 県埋文報第44集 『羽黒平遺跡』
- (注16) 白鳥文雄 1987 県埋文報第105集 『山本遺跡』
- (注17) 宇野隆夫 1989 古代的食器の変化と特質 『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』
- (注18) 工藤泰博 1977 県埋文報第35集 『石上神社遺跡発掘調査報告書』